

# 私学タイムズ

## 横道にそれるから面白い! 教科書を一切使わない “名物先生”の“名物授業”が 27年ぶりに再現されました



戦後、国語の教科書が黒塗りだらけとなっているのを見て、「生涯、心に残る授業をしたい」と思い立ち、師範学校時代に心酔した『銀の匙』を用いることを思いついた。教え子たちの中から政治、経済、ジャーナリズム、研究など各分野の第一線で活躍する人物を多数輩出したことで“名物先生の名物授業”と注目を集めた。

# 灘

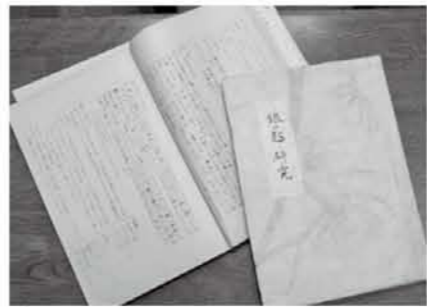
2011年6月18日、名物先生は、かつて教鞭を執っていた教壇に立ちました。この日は、中2から高2までを対象とした総合的学習の一環として、春と秋に開催される『土曜講座』の日です。名物先生とは、ベストセラーとなっ

た『奇跡の教室／伝説の灘校国語教師橋本武の流儀』（小学館／伊藤氏貴著）の主人公、橋本武さん。『土曜講座』で、27年ぶりに伝説の『名物授業』を再現するユニークな企画です。今年、99歳になる橋本さんは、

愛用のステッキを黒板にもたせかけ、集まった50人の生徒に、ゆっくりと話し始めました。「私の名前は橋本武といいます。かつてこの学校で、国語の教師をしていました」  
同校に橋本さんが国語科の教師



生徒の発言を受けて「遊ぶ」感覚で「学ぶ」。では、「ぶ動詞」のコレクションをしましょう」と、さっそく横道にそれる橋本さん。「今回の授業の内容は？」と聞きすると「その日にならないとわかりません(笑)」



「私の書斎のいろいろながらくものなどいれた本箱の引き出しに昔からひとつの小箱がしまっている」という書き出しで始まる『銀の匙』。『銀の匙研究』は、卒業生が同校に寄贈した貴重な資料のひとつ。

その結果、橋本さんは名物先生として注目されました。

この日の授業は約90分間です。橋本さんは、黒板に「遊ぶ」「学ぶ」と書き、「遊ぶ」「学ぶ」と書いたけれども何か感じることはないですか」

「遊ぶのは好きですが、学ぶのはあまり好きではありません」  
橋本さんはすかさず、「遊ぶように学ぶと楽しいね。さて、遊ぶ」と「学ぶ」には「ぶ」がつく。これを「ぶ動詞」と名づけましょう」と、話題を広げていきます。「さて、『ぶ動詞』をどれだけ思いつくか競争です」。浮かぶ、遊ぶ、転ぶ・・・あから五十音順に皆で発表していきます。「では、遊ぶ」という漢字に「ぶ」をつけると「遊ぶ」。これは今でいう留学のこと。土をつけるのと旅人の意味になる。では、人を表現する漢字には何がある？」

橋本さんの質問は縦横無尽に飛び交います。「人」を表す漢字、師、者、手などの使い方や意味の違いを説明した後、一息ついた橋本さんは教室を見渡して微笑みしました。「銀の匙」はどこに行ったんだ?と思っているでしょう。私の授業は、このように横道にそれるのです。横道にそれるから、いろんなことが勉強できるんですよ」



「先生の人柄を感じる、今日のような授業は初めて。横道にそれるからいろんな事が学べるという考え方も面白いと思いました」(中2)「『ぶ動詞』という考え方に興味を持ちました。遊び感覚で学べたら、本当に楽しいと思います」(中3)「生徒の発言で、それる横道も違ってくるのだらうなと思います。名物授業が受けられて良かった!」(中2)



先生の授業は、国語が好きになるということを超えて、生きることが好きになる授業と言っても過言ではありません(今回の土曜講座のサポーターであるOB)

「銀の匙」には、玩具、駄菓子、催事など、さまざまなきっかけが登場します。駄菓子が出てきたときには駄菓子を買って皆で食べ、文章中の出来事をそのまま体験したこともありました。文字どおり文章

を味わったのです。野菜の話が出て来たときは農家の方をお願いしました。横道にそれることさまざまな「受け取るセンス」を養うことができたと思います。「受け取るセンス」は、勉強に必要な好奇心や想像力、判断力を育てます。今日の授業は、遊び感覚で言葉のコレクションをして、自分はまだ勉強不足ということがわかれば成功。自分で問題を発見して解決することの大切さを伝えたいのです」